
真砲祇'

涅織

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

眞匏祇

【Nコード】

N5247Y

【作者名】

涅槃

【あらすじ】

以前まで投稿していた眞匏祇の続編。

今回の舞台は地球！小さな星で大きな力の衝突！

護りたいものがあるからその両足で立つ。護りたいものがあるから強くなれる。

地球での仕事を終えて眞匏祇の世界へ戻るまでの話。

第一章 ○●麻臨搜索編●○ 第一話 地球に逃れた逃亡者達

地球についてからのこの数日、良い事と言えばホテルのカウンターの女性と仲良くなったことくらいではないだろうか。そんな事を考えながらいつものように帰ってくるのを待っていた。そしてドアのノック音が聞こえて勢いよく開ける、筈だが。今日は少しいつもと違うことが起こる。

いつものようにドアのノック音がして嬉しさで飛び上がった穂琥はドアを勢いよく開け放ち目の前に立つものを確認して一度ドアを閉める。

「・・・知らんぞ、こんなヤツ」

怪訝な表情をして穂琥は再びドアを開ける。今度はゆっくりと。やはりどう見ても知らない顔の男だった。首をかしげている穂琥にその男は少し困った笑みで尋ねたいことがあると申し出てきたので穂琥がそれを聞くことにする。

「眞匏祇、ですよね？」

男がそう言った瞬間、穂琥ははっとしてドアをボタンと閉めて部屋の奥へと走った。男は何食わぬ顔で部屋の中に入ってくる。

「逃げてても構わないよ。だってここは最上階だ。逃げられない」
「あら？最上階なもの」

男の言葉に穂琥は返す。すると男は理解しかねた表情をしたが気にせずに穂琥に近寄ってくる。

男のことなどまるで無視するように慌てる様子もなく穂琥は窓を開けた。そしてその上の淵に手をかけて外へ身を放り出した。その行為に男は舌打ちをして走り出した。穂琥を捕まえるために。

放り出した身体は勢いと腕力で上に向かい屋上に着地する。それから辺りを見回してから追ってきた男のほうへと目を送る。

「そんなひ弱な力で俺に勝てると思っているのか？」

「え？私？無理よ！戦う力なんてもの！相手をするのは私じゃない。こいつ」

穂琥はさっと身体を翻した。するとそこには少年が着地していた。男としては辺りには一切気配がなかったためにその登場には至極驚いているようだった。

「はい、お願いします！薪♪」

「はいよ」

穂琥の言葉に薪が反応する。男は驚いた表情で薪を観察していた。一体何者かと尋ねてきたが薪はそれをかわした。己の正体を見ず知らずのものに簡単に明かすことなど出来ない。それだけではない。薪の身分をそう簡単には言うことが出来るわけではない。

薪は素早く移動する。一瞬にして男の足元に身を置き男のあごを捕らえて蹴り上げる。男はその痛みで声を漏らす。相手がただの人間であればこんな横暴な真似を薪はしない。でも相手は人間ではない。眞匏祇なのだから。屈んでいるその男に薪はさっと近寄ると男の額に手を当てる。

「じゃ、向こうで頑張れ」

薪の掌から眞稀が発せられる。その大ききときたら相変わらず目を釘付けにさせられる。しかし周囲には一切漏れていないのだから本当に大したものだ。

薪の眞稀によって男はその場からぱっと消えた。転送、といえば簡単だろう。地球から眞匏祇の世界へと返す行為。こうして地球にてこちらに敵意を向けて襲ってくるものは皆、眞匏祇の世界を追われた者たち。とはいっても決して薪が行った行為ではない。

薪は慥誇だ。眞匏祇の全土を支配する力を有した絶大なる存在。でもそれを薪はあまりいいようには思っていない。しかしこういう時にはそういう力を大いに使わせてもらっているわけだ。

というのも、この地球に存在する眞匏祇たちは先にも述べたが眞匏祇の地を追われた者、つまりは慥誇によって迫害を受けたことになる。慥誇によって追い出されたものは慥誇によって受け入れを受理される。薪が慥誇でなければ眞匏祇の世界へこのものたちを返すことが出来ないのだ。前代の慥誇、つまりは薪の父親が行ったことを今、返そうとしているということ。

男を転送してから薪は一息つくと穂琥に向き直って移動のことを伝えた。

「麻臨の情報が入った」

手短に薪は言うど部屋のほうにさっさと戻っていった。穂琥もその後が続いた。移動先を聞いて穂琥は嬉しくてはしゃいだ。

「また皆と会えるんだね!？」

薪はため息混じりに笑った。

今度移動する先は前に穂琥や薪が通っていた学校の付近。また中間達と会えるんだとはしゃいでいる穂琥を鎮圧して薪はホテルを出る準備を整えるのだった。

ホテルを出て移動先に到着してから薪は泊まれそうなところを探していたが、穂琥の目はまったく別のものを映し出してキラキラと輝いていた。

「薪! こっち! アレが見たい!」

「は!?! ちょ、待つ・・・」

「こっち!」

「うわっ」

穂琥に強制的に腕を引かれ声が漏れる薪だった。別にここに遊びに来たわけではないと訴える薪ではあったが穂琥の上がったテンションを抑えるには少し弱すぎたらしく、そのまま流される薪であった。

穂琥のゴリ押しで店に入った薪はため息をついて穂琥に付き合っていた。大抵女子という生き物が好むような場所に薪が飽きずにいられるわけもなく、半ば魂が抜けたように諦めてふらふらと穂琥の後を着いて行っていた。

「これ、どう!?!」

突然穂琥が振り向いて自分の首にかかっているものを見せてきた。

「あーにあってます」

「なに、その棒読み！」

薪の反応に穂琥は少しむくれながら首にかけていたものを元の位置に戻す。さもどうでも良いと言いたげな薪に文句を言うべく振り返りその薪の肩越しに見覚えのある顔を見つけて固まった。

「・・・ん？どうした？」

その様子を悟った薪が穂琥に尋ねたので穂琥は後ろを示す。薪はそれに習って振り返る。

「し、薪!？」

後ろにいたそれは驚いた声を上げて駆け寄ってきた。

「あれ？籐下？」

久しぶりだと嬉しそうな表情を浮かべながら籐下が薪の前に歩み寄る。後ろに穂琥がいることに気がつくのにやりと笑う籐下だった。

「何だ？薪、穂琥ちゃんとデートですかい？」

「あるわけねえだろ」

嫌そうな軽蔑したような、そんな顔をしながら籐下に言い放ったその言葉に籐下は苦笑いを浮かべた。

「おい、籐下！先に行くなんてひど・・・あれ!？」

籐下を追いかけてきたもう一人が籐下と同じ様に薪と穂琥を見て驚く。

「獅場！薪と穂琥ちゃんだよ！久しぶりにこっちに帰ってきたみたいだ！」

「うおっほお！？そうだったのか！久しぶりだなあ〜！」

薪と穂琥が学校に通っていた時、同じクラスだった籐下と獅場。薪と籐下、獅場は久しぶりの再会を噛み締めていると、ふと気づいたように薪が穂琥の所在を確認した。

「あれ？」

すぐそこにいたはずの穂琥がないので辺りを見回して籐下が出口付近に既に移動済みだということを伝えると薪の表情が凍った。それに籐下も獅場もぞっとして笑みのまま固まってしまった。

「勝手に出歩くなって言うてあるはずだけどお？」

「す、すみません！！！」

薪の叱責をみて籐下はふっと眉を寄せた。

旧友と出会って穂琥のテンションも最高潮に近づき楽しそうに歩いているのを薪は呆れてみていた、が。突然表情を陰しくして足を止めたので籐下も獅場も足を止めて薪の様子を窺った。

「どうした？」

「大丈夫か？なんかあったのか？」

二人の質問に薪は答えなかった。その代わりその険しい表情のまま穂琥の腕を鷲掴みして駆け出してしまった。置いていかれた二人は呆然としながら顔を見合わせた。

腕を引っ張る薪に文句を言う穂琥を無視し続ける薪に流石の穂琥も抵抗を見せる。引く薪の手を振りほどいて額に力を籠める。

「なにをするの！二人がいちゃダメだっていうの！？」

「お前は一回、頭を改良しなさい！」

警戒の色を載せたまま薪が言う。穂琥はそれを言われて初めて薪が走り出した意味を考えた。そしてふっと自分に対する殺気に似た眞稀を感じ取ってぞっとした。人がいてはそれらに危害を及ぼす可能性があるから薪は走り出したのだ。

「人気がないところまで移動するぞ」

「う、うん！」

薪に言われて穂琥も全力を以って走り出した。

誰もいない寂れた公園で薪は足を止めた。穂琥は軽く息を上げて辺りを警戒した。

「出て来いよ」

挑発するような薪の言い方にどこからともなく笑い声が聞こえた。周囲に反響して響くその声はどこからしているのかわからなかった。

「姿を晒す気は無いですね」

丁寧な言葉とは裏腹にそれに籠められた感情はまるで嘲り。薪の表情が警戒の色をなくした。

「そうか。余分に眞稀を使ってオレに勝てると思うなよ」

薪の言葉に未だ姿を見せない眞稀祇は嘲笑う。しかし穂琥は内心で思うのだ。どんなに全力を出しても勝てる気がしないと。

そうこう考えている間に薪が穂琥の視界から消えた。別に驚くことじゃない。薪なら普通のことだ。しかし相手のほうはそうでもないらしく驚いた雰囲気を醸し出していた。姿が見えないと高を括っていたのが間違いだ。薪なら眞稀を感知してどこに隠れているかなどすぐにわかる。そんなわけで簡単に引きずり出して薪は男を蹴り上げる。

「オレをやるつもりで来るのなら別にそこまでするつもりは無いけれど、穂琥を狙っているって言うなら話は別だ。少し、本気を出させてもらおうよ」

地面に叩きつけられた男はうめき声を上げる。しかし別に薪に蹴り上げられたことであげたわけではない。むしろ蹴られたというのに痛みなどどこにも無かったための疑問の呻き声だ。

「まあ、傷付けやしないよ」

薪のその言葉にどうやら甘く見られていると怒りを覚えたらしくその男は薪を鋭くにらみつけた。

「わかった、いいでしょう。貴様の言ったとおり本気でくとしましよう」

「来い」

男の言葉に対して薪は身体を半身にして右手を前に出して構えを取った。その態度に男は怪訝そうな表情をした。

「先程までとは違うのがわからないのですか？」

姿を隠すために使っていた真稀を解除して攻撃のほうに注ぐ事でその力を増大させる、のだろう。そういうことだとは思うが、穂琥には全くそれがわからなかった。きつとそれを露見したら殺されるかもしれない、薪に。そんな事を思っていると薪は男の言葉に答えて姿を変えろと言ひ、話を進めていた。姿を変えろ、といつても別に鬼のように形相が変わるというわけではない。服装の転換といったほうがきつとわかりやすい。普段は地球に住んでいる人間と同じ、つまりは洋服を身につけているがこういう戦闘においては真匏祇としての服装でなければ戦うにも戦いづらい。

そもそも服装の転換はただ単に動きやすいつか慣れているとかそんな小もないことではない。普段、地球にいるときは地球の服装に合わせるのはまあ、当然のことだろう。しかし、その地球での衣服の場合は制御が大幅に成されている状態になる。つまり、服装の転換をすることでその制限している力を解放するということだ。ちなみにこの服装の転換、つまりは力の解放を替装ていしょうと呼んでいる。そうやって替装によって真匏祇の世界にいるときと同じ格好をすることで相手を熨す力を有するのだ。

そうして薪が替装を終えてふっと落ち着いたのを見て穂琥は自分の目を疑う。普段、真匏祇の世界にいるときに着ている服装ではない。そのことを疑問に声を漏らすと薪が凄まじい勢いで睨んできて穂琥は苦笑いをして身を引くのだった。

男が勢いよく薪に刀を振り下ろした。薪はそれを後ろに飛び跳ねて避けると舌打ちをした。

「いきなり突っ込んでくるなよな」

「そんなに甘くは無い世界でしょう？それに貴様、替装したにも関わらず力に変化が無いではないか？もとより弱ったのですか？それなのにあんなに豪語するとは愚かですね」

男の言葉に薪は僅かに嘲るように笑った。その笑みに男は酷く怒りを覚えたようだったが薪の次の行動にその怒りも一気に冷めるのだった。

第二話 信賴を得た人間

替装して変わった格好には手首にリングが着いていた。それを薪は引き千切る様に取り。それをしてからの薪が放った眞稀に男は圧倒された。しかし穂琥にはその眞稀の強さがよくわからない。きつと普段から薪の眞稀に慣れているということと薪が男にしかその眞稀を放っていないことが原因しているのだろうけれど。きつとこれも薪にばれたらただではすまないので黙っていることにする穂琥だった。

男が軽く震えているのを見ながら薪がため息混じりに理解できていない男に説明をくれてやる。

「オレはね、諸事情によって替装しても直ぐに力が増大しないようにセツトされているんだよ。このリングによってね。だからコイツを外さないとほとんど意味が無いのさ」

引き千切ったリングを掌に載せて男に見せる。男は口惜しそうな顔をして黙っていた。そして薪が体制を変えて男へ突進する。その速さときたら穂琥には目で追うのがやっとだった。

「主の下へ帰らねば！」

男はそう叫ぶと地面を抉って薪の視界の邪魔をした。ブレーキをかけて薪は止まる。土埃が収まったとき、男の姿はなかった。

「あゝあ、逃がしちゃった。珍しいね？そんなミスするの」

穂琥が薪の元によって嫌味を籠めて言ってみたが思いの他自体は軽

くないことを穂琥は薪の表情から悟った。

「こうやって姿を消すときっていうのは眞稀を使う。だからそれなりの感知能力があれば追う事が不可能なわけではないんだよ」

「だったら追えば良いじゃない？」

「出来たら既に行っている」

薪の放った言葉。眞稀を完全に消されてしまっているせいでその後を追う事が出来ない事実。

「主、か……。気になるな」

薪がぼそりと言った。そんな薪に穂琥はふと疑問を覚える。薪は慥誇だ。今更ながら慥誇だ。現実世界に慥誇より強い眞匏祇は存在しないはず。なのにその慥誇である薪を凌いで眞稀を操るものがあるのだろうか。

「薪は……どのくらい力をセーブしたの？」

「あの男に対してか？ 追跡に対してか？ ま、どちらにしろどちらも全力に近い感じでやったんだけどな」

穂琥はその薪の返答に少し不貞腐れた。そういうことが聞きたいんじゃない。

眞匏祇は人間とは比べ物にならないくらい強い。そんな事言われなくたってわかる。つまりそんな眞匏祇がこの世界で大暴れするわけにもいかず薪たちは力を強制的に抑えてここにある。その地球での根本的なセーブがどのくらいかと聞きたかったのだ。とはいえ、襲ってくる側がセーブしているかは知らないことだが。

「眞飽祇のところにいる時と今との違いを聞いたのか。なるほど。そうだなあ。考えたこと無いから知らないな。適当だからな、いつも。感覚でこのくらいってね。ま、あえて言うなら10分の1も無いんじゃないか？」

ケロッと言った薪のその言葉に穂琥は頬を吊り上げた。そんな嬉しそうな顔をした穂琥に薪は首を傾げるのだった。

兎に角、一度落ち着いたのでもしかしたらまだいるかもしれない。藤下と獅場の元へ帰ることにした。

戻ればそこにちゃんと待っている藤下がいた。どうやら獅場のほうは学校での宿題が山積みらしく仕方なく萎れて帰って行ったらしい。そんな事をまるで聞かずに穂琥は自分の世界でにやりと笑っていた。

確かに今回、敵を逃がしてしまったがそれは相手が薪に対して恐怖し怯え、逃げ去ったのだ。普段の欠片も力を出すことの出来ない薪に。よかった、薪はやっぱり強いんだ。そんな事を思って笑っていた穂琥の耳に思いがけない言葉が飛び込んできて思わず現実世界に帰ってくるのだった。

「さて。話もしないとな。藤下、来い」

「ああ」

穂琥は耳を疑う。いや、待て待て。今後の話しとかもあるのだから人間である藤下を連れていては話に支障をきたすだろう。積もる話とかもあるだろうけれど今はそれ所では無いことを薪が一番よく知っている筈なのに。

疑問の表情を浮かべて薪にその疑問を言葉を使わずに何とか投げかけると薪はそれをキャッチしてあっさりとその回答を述べる。

「だって籐下は知っているから」

「・・・・・・へ？」

思いも寄らない薪の言葉に穂琥は硬直なんてもものではなかった。

「あれ？薪、そのこと穂琥ちゃんに言っていなかったの？可哀想でしょ。オレね、穂琥ちゃんたちが『向こう』に行く前に薪から聞いたんだ」

少し困ったような表情を浮かべながら籐下が語った。薪が、あの薪が！ここまで人に対して信頼をしていることが意外に思えた。

薪の掛け声でともかく移動をすることにする。宿を探していて穂琥に阻害されていたことを思い出して薪はため息をついていた。しかし、ここは以前、薪と穂琥が住んでいた場所であって住まう場所が無いわけではなかった。無論、穂琥の家は残ってない。アパートのような所を借りていたわけだから既にそこは開いているはずもない。しかし、薪のほうは一軒家を持っていたし、何かあった時用にと売却はしないでそのまま取っておいてあるはずだった。よってその薪の家まで向うことになった。

当然のように薪の家はそこにあった。これでひとまず落ち着くことが出来るということで中に入ってひとまず休息、寛いで。一息つく籐下が少し怪訝な表情で薪に尋ねる。

「何をしに戻ってきたんだ？よほどの事がない限り戻らないって言

っていた気がしたんだけど？再会は嬉しいけどそれが気がかりでさ」
「眞匏祇の世界の・・・宝、かな。宝探しをしに来た」

薪の誤魔化すような言い方に籐下はむっとしたような顔になったがどこか納得したようだった。それにしても籐下相手に、普通に『眞匏祇』という単語を使ったので穂琥は目が遠くなった。

籐下の質問で何故眞匏祇たちが襲い掛かってくるかということは今更ながらに知った穂琥だった。

地球という小さな鳥籠の中で育った白鳥。その飛び方も駆け方も何も知らない。そんな白鳥が突然籠を飛び出して大空へと舞い上がる。手を引いてくれるものと一緒に。精一杯その翼を羽ばたかせて飛び続ける哀れな白鳥。美しく飛ぶ方法知らない危うい白鳥は外敵に狙われてその命を危険に晒す羽目になる。一生懸命羽ばたくその翼の音は自らの位置を外敵へと知らせる。飛び方が危ういものに強いものはいない。しとめるのは簡単なこと。その美しき白い翼を紅く染めることは容易いことなのだ。

眞稀のコントロールがうまく出来ない穂琥はそうやって他の眞匏祇たちに自らの位置を知らせてしまう。この地球にもとより住まう者たちにとって新たな眞匏祇の来訪はただ単に己らの命を脅かす存在にしかかなりえない。故に、やられる前にやる。

「ま、そういうわけで穂琥はほっとけば簡単にくたばるから護ってやらねーといけないわけだ」

「なるほど・・・」

「でも私、白鳥か・・・きれいだあ」

「いや、あくまで大きさの例えだからな。お前は頑張って飛べてもアヒル止まりだ」

「酷い！それ！」

文句を言いながら薪の頭をぽかぽか叩く穂琥を他所に薪は何事も無いかのように話を進める。

「そんなわけでこっちに來てから随分と忙しい思いをさせられてきたんだよね」

「そっか。穂琥ちゃんってそんなに大変な状態だったんだ。人間を危険に晒すわけにはいからさつき走ってどっか行っちゃったわけか？」

「おう、そうだよ。よくわかってんじゃない」

穂琥も薪も人間ある籐下が眞匏祇である穂琥よりも物事の理解能力に長けているような気がしてならないと思うのであった。

そんな事を互いに思考していればそれを読みあって穂琥が薪を殴りにかかる。そんな状態を見て籐下は過去の薪と穂琥を思い出す。過去、といっても半年も経っていないようなそんな位だが、薪の雰囲気の変化に少々驚いた。薪は実際もっと棘のある性格だったような気がするが今はその棘があまり感じられないような気がしていた籐下だった。

「何？」

籐下の視線に気づいて薪が尋ねる。籐下は少し悩んでから発言する。

「いや、まあ。その、なんとなく丸くなった気がして」

「そうか？んー。いや、元からこんなだけだなあ。表に出さなかっただけだと思うけど」

薪は神妙な表情で笑って答えた。薪の内心ではこうして感情を表に出すようになって来たのは眞匏祇の方でいろいろあったことを含め、儒楠の影響があるような気がしていた。

穂琥が突然空腹を訴えて冷蔵庫を漁る為に部屋を出て行った。その凶太さに籐下は苦笑いをした。離れる前はもっと慎ましやかな女性であったような気がするのだけれど。籐下はそんな穂琥の背を見て薪との関係性に疑問を覚えた。

「穂琥ちゃんとき、薪って。学校にいたときはなんか突然妙に仲良さげにしていたし、薪も他の女の子に対する態度とはまったく別の態度を取っていたからてっきり付き合い始めたのかと思っていただけ、違うな」

「なんだよ、突然。まあ、そうだろう。付き合っちゃいないしもとより誰とも付き合うつもりもねえし。ちゃんと考えてみればわかるって」

薪はさもどうでもよさそうに答えた。確かに薪はそういうことに疎いから自分そう言った感情を有することは無いんだろうなと呑気なことを思う籐下だったが、では何だ。この二人の関係は。

「一体何？ 同じ眞匏祇だからそんなに仲いいのか？」

「たかが同じ種族だからってここまで必死になって護ろうとはしねえよ。そんなにオレは暇じゃない」

薪の言った言葉の意味を籐下はまだわからない。薪の性格上、護ることが出来るものなら全てを全力を以って護るはず。それでも暇が無いからそんな事をしている場合ではないと言う薪の言葉の真意は簡単なこと。薪は慥誇だ。慥誇が誰構わず手を差し伸べるという行為は簡単な話ではない。数が多すぎてそれこそどの手に差し伸べれ

ばいいのかわからなくなってしまった。しかし、薪とてそれを無視しているわけではない。慥々になってもまだ未熟さが多くあるからなともいえないが、薪の慥々としての最終目標は恨むことのない世界。そんな世界が本当にあるとしたらそこは神の世界か何か。そんな風に思うけれど極力それに近い世界を作ること。それが薪の目標、せめてもの償い。

話が反れたが、ともかく藤下は薪が慥々であることまでは知らない。故に疑問を覚える場面は多々出てくることだろう。

「で？　どういう関係なんだ？」

「双子の妹だよ、あのバカは」

それを聞いて驚愕した藤下。

驚くのも無理は無い。そもそも学校に転入してきた穂琥は最初薪のことなど欠片も知らなかった。もし、兄妹であるというのならそのときに感動の再会をしてもおかしくない。

「オレらは眞匏祇だ。記憶の改ざんくらいできる。それにそうやって記憶を失ったどこにいるかもわからない妹を探すのが前回、地球に行ったオレの本当の目的」

そう語る薪の言葉を聞いて確かに納得できる節が多くある。妙に仲良くなりだしたのもきっとその記憶とやらが戻ったことが理由だと考えれば納得できるし、他の女の子に対する態度と異なった態度を取る薪にも合点がいく。なるほどなるほどと納得している藤下の頭を薪が突然驚掴みにして地面に叩きつけたので藤下は酷く驚いたが視界の隅に鋭く光る槍のようなものが見えたのでぞっとした。

薪が籐下の頭から手を離したので頭を上げて振り返ると槍のようなものが壁に当たったらしく人一人包めるくらいの大穴を明けているのを目にした。

「悪いな、口で言うより早いと思った」

「い、いや・・・護ってくれてありがとう・・・」

よくわからないけれどそれだけは理解できたので謝礼の言葉を述べる。

薪は籐下の周りにドームのようなものを作るとその中に居れば多少はもつからと言って穂琥のほうへ走っていった。残された籐下はあまりの状況に驚きすぎて呼吸すら忘れてしまいそうだった。そしてそれと同時に眞匏祇という危険性を認識した。聞いただけでは全くわからなかったことだが、薪が全力をかけて穂琥を護ろうとする意味がなんとなくわかった気がした。一瞬でも気づくのが遅ければ籐下の頭はあの槍のようなものに粉碎されていた。そんな命のやり取り。少しも気を抜けない恐怖の世界。それを同じ年の少年と少女が身を置いている。目の前にいる。それがなんとも言えず・・・。

台所であたふたしている穂琥に駆け寄ってひとまず穂琥が無事であることを確認する。

「よかった。来い、退治しに行くぞ。籐下も居るから早いとこ片付けないとな」

「うん！」

穂琥は薪の背を追って駆け出した。

目の前に立つ男女。その風貌からしてどう考えても人間ではない。

「こんな愚図を潰すのにあいつは戸惑ったわけ？」

女が甲高い声を上げる。男は黙って目の前のものを見据える。

「こんなしよばい結界しか作れないようなヤツにアイツはすごすご負けて帰ってきたって言うの？」

「触らないほうがいい」

目の前の男女が何であるせよ、会話していることを聞く限り、薪たちにとって敵であることを意識させられた籐下。そして男の忠告を他所に女は籐下の周りに張られているシールドに触れる。すると女は数メートル後ろに吹っ飛んだ。

「だから言っただろう。雫^{だと}杜がそこまで弱い奴ではない事位知っているだろう」

「っさいわね！私より弱ければ皆同じよ！それに比べて……。今回の彼は敵ながら惚れちゃいそうね」

女は頬に手を当ててうつとりとした表情を浮かべた。先程、吹っ飛んだときに出来た傷ももう癒えている。眞匏祇ならばこれが普通なのだろうか。その辺のことは全くわからない籐下はただ、今あるこの状況下で生きていられるかの方が重大であった。

男女は籐下から目を離すとあらぬ方向に目を向けた。そうしている二人の会話で眞稀を隠していないとか、その方が抹殺しやすいとか言っているとなるとおそらく薪と穂琥のことを言っているのだと理解できた。

女はやたらと嬉しそうな顔をしながら男に行ってもいいのか訪ね

ていた。男のほうはそれを肯定していた。すると女はさらに嬉しうになり、にたつと気味の悪い笑みを浮かべるとその場からぱっと消えた。男は籐下のほうを見下ろして言った。

「運が良かったのだよ、君は。いや、悪かったのかな」

そういうと男はその場から消えた。籐下はただ黙して薪たちが帰ってくるのを待つことしか出来なかった。

第三話 影に隠れた存在

「追って来るな・・・」

走り続けてやっと止まったところで薪が言った。先程、家を襲撃してきた眞匏祇から人間を放すべく走り戦える場所まで移動して自分たちの存在はここにあると眞稀を放つ。それで向こうが此方に来てくれるなら文句は無い。文句が無いはずなのに。

「ダメなの？」

穂琥の疑問の声上がる。薪は小さく唸る。わかつてはいる。来てくれることに關してそれが狙いで誘っているのだから。ただ、相手が素直にその誘いの乗りすぎているような不安もない事もない。穂琥はいいほうに考えよう？と囁く。それに薪は頷く。

女がずっと舞い降りる。その後に男が降りる。感覚からしてこの二祇であっている。

「急ぎすぎだ、眞稀を無駄に使うな」

「だってえ。早く会いたいんだもの」

女はきゃいきゃいとはしゃいでいる。男のほうはため息をつく。

「雫杜が世話になったな」

「だど？・・・ああ、この間の男か？」

「名乗らなかったの、あのバカ！」

女が急に話に参加する。

「私は誓茄^{せいな}、よろしくね！天才の眞匏祇さん♪」

「我が名は鼓斗^{こたう}」

「へえ」

薪は警戒したように相槌を打つ。特に誓茄の言った言葉のときの薪の表情には萎縮した穂琥だった。なんだか一瞬、怒ったような気がした。

「相手に名乗らせ己は名乗らぬか」

「・・・そっちが勝手に名乗ったんだろう？認めてもないどころの眞匏祇に名を言う筋合いは無いな」

「きゃっ！いいわね！ますます気にいちゃった！」

薪が名前を伏せたのはきつとそういうことではない。いや、もちろんそう言ったことも含まれるのだろうけれど。眞匏祇の慥々である以上、その名を明かしてはいけないのだろう。だからそれは同時に穂琥も同じことだった。

「さて。戦わないとならないのか？」

腰に手を当てて薪が呆れたように言った。鼓斗はそれを当然だと肯定する。理由を薪が問うと鼓斗の言葉を阻害して誓茄が割り込んだ。

「ちょっと！気に入った子とは話がしたいの！私に喋らせて！」

薪が力を抜くように肩を落として誓茄の話に耳を傾ける。しかし、誓茄は薪が求めた回答をくれるような話をしてはくれなかった。話すのはただ、眞稀をコントロールできるという薪の性能について語るだけ。

「理由が聞きたいんだ」

薪が誓茄の話の区切って言うと言と誓茄はそれをむっとする様子も見せずむしろ嬉しそうにせっかちね、と笑う。そんな誓茄は視界の中から消える。

何が起きたかは一瞬ではわからなかった。目の前で怒りを見せる薪の表情とさらに嬉しそうになった誓茄の表情が見えるだけ。

誓茄は穂琥に牙をむいた。穂琥を斬り殺そうとした。しかし、それを薪が許すわけも無く、見事に誓茄の刀を振り払う。

「凄い！替装しないで刀を出せるのね！私たちの中でも数少ないわ〜！」

突然穂琥に攻撃を仕掛けた理由はおそらく、薪に刀を抜かせるためと、叩かなければならない理由を穂琥が知る必要も無く、そもそも存在自体が必要ないと判断したからだろう。

誓茄はただひたすら薪のその強さに惚れ込んだらしく浮かれた声を出す。その声が穂琥の耳には耳障りで仕方なかった。

「さあて。その娘を私たちに預けてくれないかな？安心して、傷付けやしないわ。あなたに来てもらいたいだけなの、我らの主の下に」

「誓茄。それは早すぎだ。もっと情報を・・・」

「構わないわ！それくらいであの方の『シナリオ』は崩れたりしないわ」

誓茄と鼓斗が軽い言い争いを始めた。段階がまだ早いと訴える鼓斗に対して支障はないと豪語する誓茄。誓茄の場合は感情論で筋がない。よって鼓斗の言葉で誓茄は唇を噛むことになる。

「主の『シナリオ』を崩すなど我らには出来はしないが、奴には出来るぞ。その位の力を有している。お前がそれは一番わかっているのではないか？故に惚れたのだろうか？」

押し黙る誓茄。鼓斗は警戒したような顔をいている。その様子をただ見ているだけの薪と穂琥。しかし、いい加減に薪の痺れも切れてきた。

「さて」

突然発せられた薪の言葉と眞稀。それに驚いた誓茄と鼓斗は息を呑むようにして薪のほうに目を動かした。

「話はその辺でいいか？そろそろ終いにしたいんだけど」

薪の言葉にかなりの警戒を抱いたらしい鼓斗は不服そうな表情をしつつも引くことを決めたようだった。しかし、それに喰らい付いたのは誓茄だった。

「面倒だな。お前らの言う主とやらがどんな奴かは知らんが。お前らが着くほどの眞匏祇だ、相当できるんだろう？そしてそんな主が作った『シナリオ』とやらがそう簡単に崩れるとはオレには思えにくい。お前ら二祇を今ここで倒したところできつと何の支障も出ないだろうとオレは思うわけだ」

薪の言葉に鼓斗も誓茄も硬直した。一度も会っていない主と呼ぶ者

の強さと力量を直感で理解し、それを口にする。

「今、引くというのなら追うつもりは無いから行け。ただし、一戦交える、はたまたこの女を連れて行こうというのならオレは申し訳ないが本気を出す」

薪の言い切った言葉に誓茄が、喰らい付こうとしたがそれを鼓斗が遮り引くことを要求する。しかし、鼓斗としてはすんなり引かせることが腑に落ちないようだった。

「家に友を閉じ込めているしな。それにお前たちみたいな奴との戦闘は極力避けたい。この地球が壊れてしまう」

鼓斗は納得いったように頷くと小さく笑ってから誓茄を宥めてその場から消えた。誓茄は薪を恨めしい目で見てから姿を消した。

やっとまともに会話が出来る。穂琥は薪に傍に駆け寄ってそっと薪の背に手を置く。

「昔、まだあの方の支配下にあったとき、罪を犯したものは絶対殺された。それから逃れようとして地球に足を運んだ」

穂琥が尋ねる前に薪は語りだした。それが嬉しいような複雑なような穂琥だった。

さすがの慥夸といえど、さすがの巧伎といえど地球まで逃れた眞匏祇を追ってまで殺すつもりは無かったらしい。何より面倒だった。地球に逃れたければ逃れればいいと巧伎は割り振っていた。

そもそも眞匏祇にとって人間に対しする負の感情は深い。人間を

毛嫌いし抹殺したいと願う程に。しかし流石の眞匏祇といえどこの地球に住まう人間全てを消し去る力を有しているわけではない。

もっとも、慤夸なら別の話したが。

よって地球に逃れた眞匏祇は結局嫌う人間の元生活しなければ習いために苦痛であることに変わりは無かった。さらに眞匏祇の世界から人間の世界に行くことは容易くできても戻ってくることは容易ではない。故に、わざわざその反乱分子を殺しに地球に赴く理由などなかった。

そして厄介なのがここから。殺されることを恐怖に思っただけで来た眞匏祇たちは大抵心弱く、この地球に足を踏み入れた眞匏祇を片っ端から消していこうとする。慤夸の追撃ではないかという不安から。だから不安定に発している穂琥の眞稀を感知すると襲ってくるのだ。さらに面倒なのは先程の連中だ。

決してそんな弱い存在には思えないのにも理由がある。ただ逃げることを選んだ先程の眞匏祇の話とは異なり、こちらの眞匏祇は慤夸に対する憎しみが強い。必ず噛み付くに戻るという意気込み。それがあるからこそ、普通の眞匏祇よりもはるかに強い力を有していることになる。慤夸に復習するために存在している集団。その一員が先程の誓茄と鼓斗、さらには雫杜ということだ。

そして問題なのは薪が慤夸であるかどうかを知っているか否か。鼓斗と誓茄は気づいていないことは事実。もし、慤夸と知っているならあんな口調、態度ではないはず。しかし、彼らが『主』と呼んでいたものがどうかは流石の薪とて理解は出来ない。

そんな話を家に帰りがてら穂琥にしていた薪だった。そんな家には途方にくれた藤下が待っていた。そんな藤下を包んでいたシールドを開放する。やっと身体を動かせるようになった藤下はうんと身

体を伸ばした。

「悪いな、籐下。無理させた」

「いや、そんな事ないよ。助かったよ」

「さて、籐下。とりあえず今日はもう帰れ」

「・・・わかった。無理するなよ、色々さ」

「おう」

籐下は少し薪の顔をのぞき見てから諦めたようにその瞳を伏せて帰って行った。

籐下を送った後に薪は気合を入れるようによしと声を掛けた。それに驚いた穂琥は薪を凝視する。

「少し移動するぞ。遠いから覚悟しろ」

薪にそういわれてぎょっとしたが移動術を使うといったので特に穂琥にすることは無いと悟る。なんたって穂琥にはその技は使えないのだから。それにしてもどこに行くのかは見当も付かない。穂琥はそれでも薪の後を着いてく。不安なんて全く無いから。

第四話 懋夸と人間の繋がり

ふわっと浮いた気持ちの悪い感覚。これが移動術の特徴。全く別の場所へ移動できる技。気持ちの悪い浮遊感が終わってやっと地面に足が着く。そうして目の前に広がる広大な土地と屋敷。一体ここはどこだ？

「ここって・・・何!？」

「入ればわかるんじゃないか？」

薪はしれっとした顔をしてさっさと歩き始める。穂琥はそれに習うしか出来なくて薪の後を着いていく。

薪はその広大な土地にずかずかと入り込んでいく。中に入ると警察のような格好をしたものが鋭く睨んできた。しかし薪はそれすら気にする様子も無くどんどん進んでいくが、その警察のようなものが近寄ってきて問い詰める。

「君達!ここは君たちが入って良い様な場所ではないぞ!帰りなさい!」

荒れの滲むその声には怒りというより警戒だった。確かにこの場は他の場所に無いどこか神聖な気配を匂わせてはいるが、穂琥には一体ここがどこなのかは知らない。その警察のような男性は薪の腕を掴む。

「君!」

その声に流石に薪は反応を示してため息をついた。男性の目の前に

手帳のようなものを押し付ける。それを一瞬だけ如何わしい表情をした後、はっとした顔をしてから薪の顔とその手帳とを見比べた。それからいまだに不信感の残る顔のまま通ることを受諾した。

穂琥はその手帳に疑問はあまり持たなかった。薪は眞匏祇で、ここは地球。人間の住まう場所。人間の世界に『まほう』なんて存在しない。故にそんな『何処にでも入ることが出来る券』などというものを簡単に入手できなくて当然ではあるが、眞匏祇である以上それらの『偽装』は簡単に出来る。が、薪の行動には疑問を覚えた。薪はあまりこういった無理強いするような行為はしない。よって、偽装するなんて如何わしい行為をするとはとても思えないからだ。

「ねえ、薪。さっきの手帳って何・・・？なんだか怪しい・・・」
「大したものじゃねえよ、オレら眞匏祇にしてみれば」

そう言って薪は手帳を穂琥に渡してくれた。手帳といっても中身は紙があるわけではなく、何かの紋章のようなものが描かれているだけだった。どちらかというと警察手帳のようにも思えた。紋章が違えうけれど。

進んでいくとそれはまあ、大きな屋敷が見える。薪は何のためらいも無くその中に入っていく。流石に穂琥も焦って身を萎縮させた。中に入ると脇に小さな扉がある。その扉に入るとそこは人が2、3人入ることが出来るか出来ないか位の小さな空間だった。

「ここ、何？何をする場所なの？」
「空間移動をする場所だ」
「・・・へ？」

人間の造った施設にそんなものが存在するわけも無い。しかし薪は

そこで移動術を行使して全く同じ場所へ移動する。

その扉を開けるとそこには美しい女性がいた。穂琥はその女性に一瞬見とれてその後、目を大きく見開いた。その女性も穂琥を知っている。そしてどんな女性かを知っている。故に驚いたのだ。そして彼女のほうもとても驚いているようだった。驚き具合では両者とも引け劣ることは無かった。そんな中に響いた張りのある声。

「急な訪問をお許しください」

薪の声を聞いて女性は驚いた表情から通常表情へと戻した。それから一体何をしに来たのかを尋ねる。その声は少しだけ震えていた。

「まずはこれ、証明書を」

薪は先程の警察のようなものに見せた手帳をその女性に見せる。女性も顔の奥で震えを見せた。しかし表には決してその様子を出さない。気丈な女性だと穂琥は感じた。それでも彼女の顔は蒼白になっていた。

「そ、それで今回は何用で・・・？」

彼女は礼儀正しく起立して薪に向う。薪も同じ様に起立して向う。硬くなっている女性に薪はそっと笑いかける。

「そんなに硬くならなくても。父上は少し異常でただけです。今、回危害を加えるようなことはいたしません」

そっと話した薪の言葉に彼女は少しだけ安どの表情を見せた。

安堵した彼女とは裏腹に穂琥は衝撃を受けて仕方なかった。

彼女は間違うことなく人間だ。その彼女に薪は『父は』と語った。つまりは薪の父を知っていることになる。そして今の薪とは異なり、父、つまり巧伎が眞匏祇であることを隠して彼女と接したとはとても思えない。

「巧伎様は・・・？」

「・・・他界した。随分と前に。その報告を兼ねてここへ来させてもらいました。遅くなってしまったことをお詫びします」

「い、いいえ・・・」

彼女の瞳は揺れていた。

まさか人間とこんな関わりを持っていたというのか。驚きでしやうがない。巧伎がこの女性を殺さなかったことが少し意外にも思えるほど、彼女の権力は相当強い、はずだ。懟を前にすればかすんでしまうけれど、この地球にとっては相当な権力。

「あの、陛下。失礼致し・・・客人ですか・・・？」

部屋に入ってきた一人の男性。

名前を確か、貴船小夜きふねさよと言った。この女性は何を隠そう、この地球のトップ所有者、天皇陛下というわけになる。

入ってきた男性を小夜は何とか宥めて部屋から追い出した。薪は申し訳ないと謝罪の言葉を述べるが小夜は必死でそれを否定する。

「いえ、貴方様が悪いわけではありませんので」

小夜の敬語に一瞬だけ薪は不機嫌そうな顔をしたが直ぐに戻した。もとより彼女は敬語を使用する立場の人間なのだから当然だ。相手が慥々であろうが何であろうが関係ないということを思い出す。

「それで。何用でしょう？」

最初よりは大分落ち着いたその声に薪は安心したような顔をしていた。

「麻臨という危険な宝玉が此方に来てしまつて。それを回収するのが今回この地球にお邪魔させていたただ理由です」

小夜は麻臨と言う言葉を聞いて目を丸くした。別にその言葉を知らないわけでは無さそうだった。とすると、おそらく巧伎からの情報を与えられているのだろう。

「その回収作業をするので多少なりともこの地球の軸が揺らぐかもしれませんが、揺らいだぶんはしっかりと元に戻しますので」

小夜は納得したように美しく頷く。

それに反して穂琥はそろそろ我慢の限界に達していた。

「薪！一体何？！天皇陛下だよ！？この世界のトップだよ！？っていうか人間だよ？！何考えているの！？」

「何も考えていないお前には言われたくない台詞だな」

「酷い！」

突然話に乱入してきた穂琥に小夜は酷く驚いていた。まるで今までその存在に気づかなかったみたいに。震える声で穂琥が何であるの

かを尋ねてきた。

「私は穂琥です！ホクⅡスインスⅡトウウェルブ！薪の妹です！」
陽気に答える穂琥に少し面食らったように頷いていた。

「さて、お忙しいところ時間を頂いてしまって申し訳なかった。ではまた来ます。その時は良い報告を持って」

小夜はその言葉にはっとしたように深々と頭を下げた。そうして薪と穂琥はきたところから帰るのだった。

「薪様・・・、ですか。懃懃もお変わりになられるのですね・・・。
巧伎様と異なり素晴らしい方です・・・」

小夜は一人になった部屋でそう呟いた。

穂琥はひたすら薪に投げかける。人間ともそんなかわりがあるなんて知らなかった。しかも相手は天皇陛下ときたら驚きだ。しかし、薪はさらりと凄いを言っただけ。

「ま、所詮天皇だしなあ。懃懃なんかを前にしたらまだまだ小さい存在だよ」

本当に我が兄ながら一体何処までコイツは・・・。穂琥は小さくため息をつく。ここに来てより薪を遠く感じた穂琥だった。
そんな薪はこの皇居に危害が及ばないように普通には見えない特殊なシールドを張った。これでおそらく、相当の手誰が登場しない限りここに手を出すことは出来ないだろう。

皇居を出ると穂琥は鋭く肌を刺す殺気に似た眞稀を感じた。それを薪に伝えたと少しやわらかい笑みを向けてきた。

「そういうの、分かるようになったんだなあ」

「なんか腹立つ！それ所じゃないでしょ?!」

「はいはい」

妹のちょっとした成長を噛み締めながら薪は足に眞稀をためる。穂琥がその行為に疑問を感じている間に、薪はさつと穂琥を抱えて空へと飛び上がるのだった。無論、穂琥の大絶叫をおまけして。

第五話 新たな幕開け

今感知した眞稀は全部で4つ。つまり4祇いるということになる。

穂琥を連れて薪は敵の待つ場所へたどり着く。誓茄と他にも女が一祇と男が二祇いる。見覚えの無い顔ぶれだった。

「何用だ？」

薪の言葉に誓茄は嬉しそうに微笑んだ。

「何、こいつら。強いのか？」

誓茄の隣に立った女が嫌そうな声を上げた。誓茄はそれを聞くと自慢層にお気に入りだと鼻を鳴らした。そのやり取りを見て薪は肩を落とす。

「へえ！鼓斗と戦うのを拒否したっていうやつか?!」

その後ろにいた男が感嘆の声を上げる。さらにその後ろにいる男は此方を睨むようにして押し黙っている。

女の名前は圭^{けい}、男の方は流貴^{るき}。ずっと黙って言葉を発していない男が瞑^{べい}。誓茄は相変わらず腕を組んでにやりと笑っているが、圭は戦闘態勢に移ったので薪は目をずっと細める。

「やるのか？」

「おい！？この数を前にしてやる気なのか？大したものだな！？」

薪の言葉に流貴が反応を示した。薪のその強気は圭に買われたが結局、やらるのは薪であると圭は豪語した。

「つつても戦闘するつもりは無い。『シナリオ』とは異なるからな」

圭が額に力を入れて言う。相変わらず誓茄は信徒の一戦を交えたくてもうずうずしているようだがの圭もその様子を不思議に思っただらしく、そんなに気に入ったのかと尋ねた。

「ええ！強いわよー！」

「……………。一戦、やりたいな」

圭の言葉。それに流貴は驚いたようにやるのかと聞いた。そうやって騒いでいる中に穂琥が少し怯えているのを薪は感じた。

穂琥の瞳に映る4祇の眞匏祇たち。そのうち、一つだけ特殊な存在を感じる。本来、眞匏祇は眞稀を完全に消して気配を消すことは出来ない。薪とて眞稀を最小限に抑えていて普通の眞匏祇にとってはまるで消えているように感じるだけのこと。桃眼で視れば眞稀を視る事は案外容易くできる。

しかし。たった一祇。根本的に眞稀を見ることができないものがある。そのものに対して酷く怯える穂琥。そして様子から察するに薪もそれに気づいているようにも思えた。

「あんた、名は？」

低く、重たい声。まるでそれは鉛のように。その声が響いたとき、さっきまで騒いでいた誓茄や圭、流貴は押し黙った。

声を発したのは瞑。眞稀を見ることが出来ないもの。その瞑に名乗ることは出来ないと答える薪。すると瞑は薪を一度鋭く視てから視線を外した。

「名は？」

再び問う。薪はその瞑の言葉に何故か焦りを感じた。一体何故自分が焦ったのか理解することすら出来ないほど、妙に焦ってしまっていた。

「断ると、言っただが？」

「何故語らぬ？」

「・・・語れぬ理由があるからだ」

薪の言葉全てで瞑はまるで何もかもを見据えていそうな気がしてならなかった。

一方の、誓茄たちは正直驚きで言葉を失っていた。滅多に声を発しない瞑だが、今、目の前にいる少年に興味を持って話しかけていることが意外で仕方なかったのだ。普段から全く喋らず実際、声を聞いたのだってこの長いときの中で2、3度といっても過言ではない。そうだというのにここまで語っているとは驚く以外に無かった。

瞑は軽蔑するように薪を睨んだ。しかしその後、目を伏せて呟くように言う。

「エンドと同じ『気』を感じたが。気のせいかな」

薪はその言葉に全身に鳥肌が立った。自分の奥からこみ上げくるものは何だ。驚きか。いや、きつと違う。これは悲しみと憎しみ。そ

してそう感じた自分に怒りが沸く。

瞑はそのまま喋らなくなった。薪はそんな瞑を凝視する。しかし、瞑はもう言葉を発する気は無いようだった。

「あの、瞑、さん？」

穂琥が急に会話に参加した。薪は驚いて穂琥に振り返る。穂琥の瞳に残る眞稀を感知して僅かにでも開眼したことを知る。

「貴方、一体なんですか？『何』ですか？」

穂琥の質問に瞑は不機嫌そうに顔を歪めた。しかしやはり何も言わない。瞑の中で既にもう何も言う必要がないと判断したのだろう。

その異様な空気に気圧されていたのは何も薪だけではない。当然、瞑と共にここにいた他の3祇もダメージを受けているようで若干の狼狽した様子を見せていた。

「引いてもらえないか？」

薪の声に賛同するように流貴が声を張る。

「おし、ここは引こう！一度戻って体制を立て直そうじゃないか？！」

それに同意する誓茄と圭。無論、瞑も引くつもりのようなだった。少しだけ安堵する薪。しかし、瞑がふっと薪を睨む。薪はその目に一瞬だけ心臓を貫かれる感覚を覚えた。前にどこかでそれに似た何かを感じたことがあるような。

「あんたと遣り合う時を待っているよ」

先程までの話の中で一番重たいその声にぞっとする薪。本能が告げる。この男は交えてはいけない、何があっても、と。

そうして彼らは姿を消した。全身から力を抜いた薪は腰を下ろす。そしてどっと疲れた息を吐ききってから穂琥に投げかける。

「なんであんなこと聞いた？」

「ご、ゴメン……。でも気になって……。だって……。だって眞匏祇じゃないよ！アイツ、何！？だって！！」

「落ち着けて」

薪の宥めるような声に穂琥は黙る。穂琥のいつていることはおそらく事実だ。眞匏祇であるのに桃眼ですら眞稀を視る事ができない。それにあの異様な空気。普通の眞匏祇とはとても思えない。

「ねえ」

神妙な面持ちで穂琥が薪に呼びかける。薪は目だけを穂琥に向けて反応を示した。穂琥は少しだけ黙ってからそっと口を開いた。

「綺邑……。さんって、眞匏祇とは全く違う生き物だね？」

「？ 当たり前だろう」

穂琥の質問に疑問の表情を浮かべる薪。薪の返答を聞いてさらに押し黙る穂琥の様子を見て、薪ははっとした。

「お、おい……。まさ、か……」

「い、いや、わからないけど！」

僅かな可能性。しかしその可能性を否定することも出来ないことも事実。綺邑にそのことを尋ねてみても構わないかもしれないが、取り合ってくれるとはとても思えないのが現状。

瞑は死神かもしれない・・・—

第六話 属する世界の違い

帰宅途中の出来事。薪がはたと足を止めた。そしてあらぬ方を見て怪訝な表情を浮かべている。それから穂琥の腕を掴んで着いて来いと走り出す。何が何だかわからないけれど諦めて着いていくことを選ぶ穂琥だった。

とある家の前で薪の足は一度止まった。そしてその家を凝視している。その様子を見ていることしか出来ない穂琥は怪訝な表情を浮かべる。そして薪はその家のインターフォンを押す。しかし、返答は無い。留守なのかと思った穂琥だったが、薪は何も気にしないかのように勝手に家の敷居をまたぎ、玄関の戸を開けてずかずかその中に入ってしまったので驚いたなんてものではなかった。

中には頬を濡らした女性がいた。その膝元には白い顔をした男性が横たわっている。見るからに既にその顔に生氣は無い。息を引き取った後だろう。

そんな女性にも気にしないように薪はきよろきよと辺りを見回している。勝手に入ってきた男女にその女性は酷く驚いている様子だった。穂琥はそんな女性に平謝りして何とか薪から意図を聞きだそうとする。

「旦那、か。いつ逝ったんだ？」

薪の言葉に流石の穂琥も怒りが沸いた。大切な人を失った人間にそんな言葉をかけるなんて酷すぎる。しかし、よく見ると薪の目は女性を見ていない。むしろまったく別のところを見ている。それから怪訝な表情になる薪。

「居るんだろう？そこに。出てきても良いだろう。この男に何かあるのか？」

薪が突然喋りだす。穂琥もその女性もチンプンカンプンで硬直する。一体薪は何を言い始めたのだろう。穂琥でもわからないのだ、この女性にそれがわかるわけも無い。穂琥は半ば、薪の頭が壊れてしまったのではないかという不安に駆られた。

「出ないか……。この女性の記憶はオレが持つ。いいだろう？」
「ふん」

薪の言葉に呼応するように響いたその声に、女性は酷く驚いて反応する。誰も居ないはずなのに、声が無処からとも無くしたのだから。その声を聞いた穂琥のほうは久しぶりに腹の底からぞっとしたものを感じた。怒りというか、なんというか。前回会った時と同じ様な感覚。儒楠が『嫉妬』と呼んだ感情だ。つまり。今声を発したのはあの『ヒト』だ。

「よう。久しぶり、でもねえか」

笑いながら薪は言った。

真っ黒いローブのような服。フードを深くかぶり容姿がはっきりと輪郭取ることが難しいそれは横たわる男性の脇に現れた。

「貴様の助力をする為に居るのでは無いぞ」

男か女か、わかりづらいその声音と口調だが列記とした女性。死神、綺邑。

「わかってるよ。さて、あなた、名前はなんていうの？ちなみにオレは薪。これは穂琥。ちょっと用事があってここまで来させてもらった」

薪の唐突の質問に、むしろ此方のほうが聞きたいことがたくさんあると言いたげにその女性は言いよどんだ。

「幸奈ゆきな、です。このヒトは翔蒔しょうじです」

幸奈と名乗った女性は震えた声でそういう。目の前の少年たちは一体ここに何をしに来たのだろうか、わかるわけもなく、また教えてくれる様子もなく。

薪は幸奈の名を聞いた後に綺邑に向き直る。

「で？綺邑よ。何故お前がここに？」

「これは私が扱う」

ぶつきら棒に冷たく言い放った綺邑だが薪は折れることなくそんな綺邑に尋ねる。だから、何故？と。綺邑は面倒くさそうな表情をしたが諦めたように語る。

「罪。しかし別に悪くは無かろう。救ってやろうとは思う」

綺邑の言葉に幸奈は震えた。言っていることはきつと理解し切れていないだろうけれど、何故、この翔蒔が死んでしまったのか経緯を考えると、最初に言った『罪』という言葉に引っかけりを覚えたのだろう。幸奈は綺邑の言葉に聞き入るようにして耳を傾けた。

「が」

綺邑は言葉に否定的な接続詞をつける。薪もその接続詞を気にして首を傾げる。綺邑が助けると判断したのであれば、難なく救うことが出来るはず。否定する要素など無いはずだが。

「この男自体に生きる意志が無い」

薪はその言葉に差し当たって疑問に思うことは無かったらしく黙する。しかし、穂琥と幸奈はその言葉に驚く。幸奈にいたっては薪や穂琥が何で、綺邑が何かを知らないから、余計に混乱しているのだろう。

「オレらは『真匏祇』という種族だ。そしてその黒いのが『死神』
といったところだろうかね」

幸奈はひたすら口をパクパクさせていた。現状を理解することが出来ていない。

「死神自体はなんとなく耳に覚えはあるだろう。ま、その覚えのものイメージとは随分と異なったものだけだね。ともかくだ。オレも詳しいことまではよくわからないし、知るつもりもない。けど、この死神はあんたの旦那を生き返しても構わないと言っているんだよ」

薪の羅列する言葉に幸奈はさらに混乱する。しかし、生き返らせることが出来るということを知って幸奈ははっとした表情を見せた。

綺邑が誘うのは死者の魂。事と場合によってはその魂をもとある場所へ返すことが出来る。現に、薪もそれで命を救われているのだ

から。しかし、今戻そうとしている男、翔蒔の魂は元の器に戻ることを拒否した。過ちを犯したことによる罪悪感で元に戻るのもおこがましいと。

「オレも過去に過ちを犯した。そして死ぬはずだったところをこの死神に救われた。気持ちはわかる。でも、死ぬことが罪をかぶることではない。罪を償うことではない」

薪の声に諭されるように幸奈は瞳を揺らした。

「生きて、やらねばならぬこともある」

「あなたは……一体、何？」

「此処には有らぬ存在、というかね」

薪はそつと言ひ募る。今までの薪とはどこか雰囲気が違う気がする。その言葉回しがどこかかっこよく思う穂琥だった。

「あなた達は……一体……。私にとって何ですか？ 幸ですか？ 不幸ですか？」

震える幸奈の声。それが求めるものは光か闇か。幸奈に期待に沿う事を言うつもりは無い。いや、いうことはできない。だから薪はありのままを伝える。

「オレ達がそれを決めることは出来ない。あんたが決めればいい。ただ、オレはあんたに幸福をもたらしたいとは思っているということは伝えておく」

信じる信じないは別の話。薪たちは幸奈に味方するつもりでいる。しかしその『想い』が幸奈にとって幸福になるかは分からない。感

じ方など様々だから。

薪の言葉に幸奈はふっと肩の力を抜いた。そして潤んだ瞳で小さく呼応する。

「貴方たちを信じます」

第七話 明らかになった存在

綺邑が嫌そうな目で薪を睨む。幸奈の返答を聞いて話しが一時、完結したためにその場から消えようとした綺邑を薪が呼び止めたのが原因だ。

「貴様、この期に及んでまだ何か？」

冷たく重いその言葉に慣れていない幸奈はぞっとする。無論、穂琥もしたけれど。それでもめげない薪の神経はどれほど凶太いのだろう。

「まあ、いいじゃないか！一つ！聞きたいんだ。それ答えてくれたら行っていいから！」

薪の回答に綺邑は冷たく睨む。しかし、この沈黙は綺邑の肯定の仕方だ。薪は軽く謝礼を述べてから質問をぶつける。

「お前って一人か？」

「は？貴様、何を言っている？」

「いやな、死神はこの世に一つしかないだろう？二つも在る事が出来るのかな、ってさ」

薪の質問に綺邑は怪訝そうに眉を寄せた。

「瞑、って言うんだけどさ。知っているか？」

「いや。知らない」

瞑の質問であるなら穂琥も参戦したい。

あの違和感はまるで違う。眞匏祇のような雰囲気を漂わせているというのに眞稀が全く見えることが出来ないあのへんな『生物』を。

そんな疑問と不安を綺邑にぶつける。ぶつけられている綺邑はひたすら黙っていた。此処まで黙する綺邑も相当珍しい。肯定というわけではなく、思考しているのだ。そんな思考する時間に綺邑はあまり時間をかけない。その思考している時間すら惜しい。故に思考することを止めて知らんと答えるのがいつもだ。

「知らんな」

長い沈黙の後に綺邑は答えた。

「聞いた限りでは記憶に無い。会って観ないとわからんが、会うつもりは無い」

言い切った綺邑の言葉に穂琥は怒鳴るように言い返したが薪がそれを制止する。

「なら会わなくてもいい。オレの記憶を少し見てくれないか？」

綺邑は一度面倒くさそうな顔をしたが仕方ないといった風で薪の傍により薪の額に綺邑の額を当てる。そして目を閉じる。そうして薪が綺邑へ眞稀を流し込めば、その眞稀の流れに乗って過去の記憶映像が相手へ届く。

映像を見終わった綺邑は薪から離れてさらに黙した。見覚えがあるのかないのか。知っているのか否か。綺邑は答えない。

「あの・・・」

弱々しい声が沈黙の中に響いた。それで気づいたがすっかり幸奈が居ることを忘れていた。

「瞑、というのですか？私も・・・その方を知っています」

幸奈のその台詞に全員が驚く。

翔蒔が息を引き取ったのは昨日の事。その日に起きた出来事。

幸奈は今にも消え朽ちてしまいそうな翔蒔の面倒をしきりに見ていた。

「迷惑かけてすまないな・・・」

「いいえ、いいのよ。ずっと二人でって、決めたじゃない」

うつろな目の翔蒔に必死に言葉を掛ける幸奈。翔蒔はただ過去を悔いていた。悪いことをしたのは地獄に落ちるのが定めなのだと。

「そんな事言わないで・・・。貴方は悪くないわ。いつかきつと救われる。いつか・・・」

「ああ・・・そうだといいなあ」

翔蒔のその声には諦めが混ざっている。きっと自分は救われない。幸せになってはいけないのだと。自分はどんなに不幸でもいい。だから目の前のこの女性にだけは幸せでいてほしいと願うしか出来なかった。

「失礼」

玄関のほうで声がする。幸奈は客だといって立ち上がった。

突然現れた男は暝と名乗り、翔蒔の病を治せるかもしれないといってきた。それに歓喜した幸奈は暝を中に入れた。

しかしどうにも胡散臭い。暝はふふ、と笑って翔蒔の額に手を置いた。やったことといったらそれだけだ。立ったそれだけの行為で暝はこれで帰ると言う。

何が何だかわからないまま幸奈はその暝を見送ってしまった。そして戻ってきた時、翔蒔は息を引き取っていた。

穂琥はその話を聞いて震えた。普通の人間ならわからないかもしれないけれど、眞匏祇である穂琥にならわかる。額に手を当てたとき、確実に暝は翔蒔の生気を吸い取った。ヒトの命を一体、何だと思っているのか！腹立たしくてたまらない！

「落ち着け、穂琥」

薪に言われてむっと黙る。そして薪はそのままひたすら黙っている
綺邑へ目を送る。

「おそらく・・・奴の名は邑顚ゆうえいだろうな」
「知っているのか？」

綺邑はなんとも口惜しそうな顔をしていた。こんな風に表情を歪ませたところを始めてみた。

「死神だ。元な。今は違う。既にこの世には存在していないはずの

ものだ」

綺邑の語り方と雰囲気。そして元死神であるという綺邑の言った事実を踏まえて導き出るたった一つの答え。

「お前の・・・父親か？」

綺邑は小さく頷いた。肯定の仕方にそれを用いたことが無かったので薪も穂琥も少し面を食らった。まさか、一度朽ちたはずの死神が再びこの世に舞い戻るなどありえない。あっていいはずが無い。しかし、邑頼は綺邑の父。もとより凄まじい力を有していたことは事実。もしかしたらそうして今この世に存在することは造作も無いことだったのかもしれない。

「さて。記憶はオレが持つ約束だったな」

薪がパンと手を叩いて空気を割った。話に段落が着いたからだ。必要なことは全て聞いて今の薪にとって欲しい情報は大抵入った。よって此処に長居する必要は無い。

「此処であったこと、全てをオレがもらう。つまりはあんたの記憶を消すって事だよ、幸奈」

幸奈は息を呑む。せっかく知り合えた彼らのことをすっかり忘れてしまうのは悲しくてたまらない。切なくて仕方ない。

「すまないね、約束があるんだよ。綺邑に出てきてもらうとき『記憶はオレが持つ』といってしまったからね」

「私は見世物じゃない。たかが人間風情が私を記憶しておくなど痴がましいと知れ」

綺邑の発言に幸奈が震えた。その殺意にも似た感覚に幸奈は恐怖したのだ。そして、俯いて苦しそうに顔を歪めて、記憶を消し去ることを承諾した。消えてしまえば何も残らない。今ある不安も記憶さえなくなれば消えてしまうのだから。

「おい」

薪が記憶を消す作業に入ろうとしたとき綺邑が幸奈に声を掛けた。幸奈はきよとした表情をした。

「最後に聞きたい事がある。答え次第では其の俤にしても構わん」
「ほう？」

綺邑の言葉に反応したのは薪だった。そのことに綺邑はいささか不機嫌そうな顔をしたが気にせず話を進めた。

「まだ、話が残っている。暝と名乗った男、何を手渡した？」

幸奈はその言葉で酷く驚いた顔をしていた。そしてその回答を幸奈は渋った。そのことに綺邑はふんと鼻を鳴らして面倒臭そうに薪を睨む。薪はそれを受けて肩を落としてから幸奈の肩に触れる。

「こういうことは言ってしまった方がいいよ。別に悪いようにはしないし。特にオレ達にはね。それに事と場合によっては記憶が飛ばずにすむのかもしれないし」

幸奈は悲痛な表情でしばらく考えてからわかったと承諾すると部屋の奥へ入っていった。それを見詰めて薪は少し警戒の色を強めた。

第八話 魂石と共鳴する意味

暝は語る。誰にも言うてはならないと。そうして渡してきた小さな箱。ここに有らぬ者たちが来たときにそれを渡すようにと言った。そうして暝は立ち去る。その立ち去る間際に振り向いてふいに笑って言った。

「礼だ、と伝えておいて欲しい」

幸奈はその箱を薪に手渡す。薪はそれを手にした直後、その中身を悟った。そつとあけるとやはり思ったとおりのものが入っている。しかし、形は想像とは全く異なるものだった。

「魂石、だな」

「そのようだな」

薪の言葉に綺邑が反応する。しかし、穂琥にしてみれば薪の持っている箱の中身が魂石であることがわからない。魂石とは本来、掌に乗るくらいの硝子玉のようなものだ。その美しさときたらそれに匹敵するものなど有りはしないほどに、命の輝きだ。

箱の中に入っていたものは色は完全にくすみ、不透明であったし形も球体ではなく歪な、星型のように凹凸のあるものではっきり言えれば見るも無残な形であった。

「仲間の？」

穂琥がそつと尋ねる。しかし薪はそれを否定する。眞稀は今までに

会ったことのないものだ。そして魂石だと知ってから綺邑の挙動の変化に薪は疑問を覚える。そして一体綺邑が何を考えているのかを出来る限り考える。そうして見つけた一つの可能性。

「幸奈が眞匏祇だとしても言いたいのか？」

「可能性が無い訳では無いな。共鳴している」

「なんだよ、共鳴って。確定じゃねえか」

綺邑の言葉に薪は鼻で笑うように返した。しかし綺邑はそれでも回答をはぐらかす様な言葉しか言わない。

「何だよ、それ。何なら試すか？」

「好きにしろ」

薪は幸奈に向き直る。そして幸奈が眞匏祇か否かを調べると言う。幸奈は混乱する。

「大人しく黙っていればそれで良いんだよ」

綺邑の言葉に幸奈は身を縮める。しかし、理解も出来ないこの状況でそんな事を言われる幸奈が可哀想過ぎて穂琥は綺邑に噛み付く。

「何それ！そんな言い方しなくてもいいじゃない！」

「煩い。少しは黙っていられないのか」

「んな！？」

綺邑の返しにイラッとする穂琥。今すぐにも殴りにかかりたい衝動に駆られたが、そこはなんとか抑えた。

「それに眞匏祇な訳あるの！？」

「それに関してはお前が一番わかるだろう」

返答した薪の言葉に穂琥は返すことが出来ない。確かに事実だ。自分はこの年近くなるまで自分が眞匏祇であることを知らなかった。正確には覚えていなかった。故に幸奈も、同じ事。さらに幸奈の場合、体内に魂石を宿しては居ない。だからこそ、体外に眞稀がもれ出ることが無かった。薪でも気づくことが出来ないほどに。

綺邑に急かされて薪は調査にかかる。

幸奈の前に立った薪はその幸奈の足元に陣を描き始めた。その光景はきつと幸奈にとっては信じられないことかもしれないけれど、今更それに驚くことも無いと幸奈は意外に冷静にそれを見ていた。

薪が描く陣。ペンなどの書き記すものを一切持っていない薪の指から発光色の橙が生み出されている。眞稀より発せられたもので描いているので、それなりに眞稀を有している者でなければ陣を書き上げる前に眞稀が尽きて失神してしまう。

「さて。これで準備はオッケイ」

書き上げた薪は陣から出て陣の手前に諸手をつく。そしてその陣へ眞稀を流し込む。

陣は橙の色をより深めて輝いた。それを見て薪はにやりと笑って立ち上がった。その際に陣も消え去った。

「決まりだな」

薪は腰に手を当てて綺邑のほうへ目をやる。綺邑は不機嫌そうに鼻

を鳴らすだけだった。

「えと・・・？」

「あの・・・」

穂琥と幸奈の声が重なる。薪はそれを聞いてそちらに目をやる。一瞬、穂琥を軽く睨んでから幸奈のほうに目を移す。

「陣が無色に変化すればそれは眞稀を有していないということ人間。橙がより強まればオレとその陣の中央に立っているものの眞稀が共鳴したということであり一層橙に輝く、つまり眞匏祇だということ。つまり、あんたもオレらと同じ、眞匏祇ということ」

幸奈は呼吸を少し荒げて不安そうな顔をしている。それも当然だろう。

薪に睨まれて萎縮したが、知らないものは知らないのだから仕方がないだろうと内心で文句を言った穂琥だったが、それを悟った薪がまた睨んできたので今度は本当に萎縮することにした。眞匏祇の事を知らなさ過ぎると自覚する穂琥だった。

「帰る」

綺邑が無造作にそう言って姿を消した。幸奈はそれに一瞬びくつとしたけれど、薪が姿を現すことが出来るのだから消す事だってできるさと、乾いた笑いを立てたので幸奈はひとまず納得することにした。

「さて、幸奈さんさ」

「・・・は、はい・・・？」

薪は幸奈に向き直る。

第九話 自覚の無い眞弛祇との出会い

先程であった二人の子ども。摩訶不思議でいまだに信じられないその存在にどこか頼ろうと思ってしまうのは何の心理か。兎に角。そんな二人についていけばきつと何か道が開けるかもしれない思ってここまでついてきたが、一体この二人の口論はいつまで続くのだろうか。幸奈はただ、そこにたつて二人を見ているだけだった。

「だあかあらあ！」

「仕方ないだろう！仮にも女だろう！」

「仮って何よ！仮って！立派な女です！」

「仮だろう！お前の何処が女だ！」

「立派な女性じゃない！！！」

最初の論議から大分外れた話になっている。感情論で言い争いをしているのが原因だろうと、幸奈はそれを見ている。

そもそもこんな口論になったのも今から30分前の事。口論の優勢に立っている男の子とそれに必死に喰らいつく女の子。男の子が薪、女の子が穂琥。そして幸奈の三人は寢床について話を始めたはずだったが気づいたら口論になっていた。穂琥と幸奈はホテルを借りてそこに行けと薪が言う。しかし、穂琥の言い分は薪の家に行くという。

「寝るところだってねえだろう！」

「あるもん！二個！」

「二個じゃ足りないだろう！？」

「足りるもん！私達は布団！薪は屋根！」

「オレは外か！」

この二人は口論をしているのか漫才をしているのかわからなくなってきた幸奈だった。そしてそんな二人を見て少しおかしくなってしまうた。

「ぷふ・・・」

うっかり声に出てしまっただけが理由で二人の口論という名の漫才はを終焉を迎えた。

「あ・・・ゴホン・・・。済ません。コイツと一緒にホテルに泊まってください。ホテル代などは気になさらないで結構ですの」

薪はそう言って穂琥を差し出す。そんな彼の態度に幸奈は疑問を覚えていた。幸奈が年上ならば敬語を使うことになんら疑問を感じることは無いのだが、この少年は先ほどまではそう言った態度は一切無く、突然こんな態度を示した。そんな不思議な少年に混乱を抱いたままだ。

「では、オレは情報を集めに行きますので、失礼します」

薪はそう言って姿を消す。幸奈は呆然と彼の背中を目で追ってから足元で不貞腐れている少女に手を差し伸べる。

「あ、どうも。ありがとうございます、幸奈さん！」

かわいらしい笑顔で幸奈の手を取る。この少女は会ったときから態度が変わっていない。なら、特別なのはあの少年か。

「仲、いいですね」

「え？そう見えます？あんなので？」

「ええ。とても。素敵なご兄妹だと思うわ」

穂琥は一瞬、驚いた。薪と穂琥の関係で兄妹だと言ってきたのは幸奈が初めてだ。そのことを幸奈に伝えるとやわらかい笑みを見せた。

「大人が見れば恋人には見えないわ。とても仲良しには見えるけどね。貴女がとても彼の事を慕っているということも」

「え・・・そ、そんな事までわかつちゃうんですかあ？照れちゃうなあ・・・」

穂琥は頭をかく。大切な兄。大好きな兄。だからずっと一緒に居られる。不安なんて何も無くて。

穂琥と幸奈は薪に言われたとおりホテルに入る。部屋に入ってゆつくりとくつろぐ。そうしてゆったりとしていまだに信じられない中に身を投じているのだと考えると実感がわかない幸奈だった。そもそも、一緒に来るようにと薪に言われたからここにいるが、一体何故一緒に行くべきだったのか、説明を受けていない幸奈は少し不安ではあったけれど、この穂琥という少女然り、何故か幸奈も薪という少年を信じてしまう、信じさせる力を持っているように思えた。とにかく。今は何もわからない。きつと彼はそれを説明してくれるはず。それを信じて幸奈は休むことに決めるのだった。

翌朝、いつ帰ってきたかわからない薪に起こされて不機嫌に答える穂琥。

「なあに？」

「幸奈さんは？」

「奥」

「そうか」

穂琥の指差した扉を見て薪は肩を落とした。

支度が出来たらしい幸奈が部屋から出てきた。そしてそんな幸奈に薪は少し考えてから尋ねる。

「ねえ、幸奈さんさあ。ま、あの時は記憶を消すつもりだったし、そのまんまでいったけど。敬語ってオレ、嫌いなんですねぇ。でもやっぱ人間だし、目上には敬語かな？って思ったけど。やっぱり嫌いなもんは嫌いだ。だから、いいですかね？普通に」

本当に年上というものをかなぐり捨てたその発言に幸奈もだが穂琥も驚く。ここまですっ飛ばして言い切ることの出来る薪が凄いとすら思う。

「構いませんよ・・・」

幸奈としてはきつと理解できたこと。薪の態度の変調に。

「それで、幸奈さんさ」

「幸奈、で結構です」

「そう。じゃあ幸奈さ」

幸奈に言われたとはいえ、簡単に敬称を剥奪させたよ、コイツ・・・と思う穂琥だった。

「はつきり言ってあんたは危険な状態にあるんだよ」

暝、邑頴が一体何を思って幸奈に魂石を与えたのかわからない。主と称してそれに付き従っているあのもの達がそのことで動き出さな

ければいいのだが。ともかく色々危険が生じるということ。

「だから日常生活ではオレが絶対に護る。それは約束する」

強く放たれたその言葉にどれだけの深い意味が籠められているのかは、会ったばかりの幸奈にはきつとわからないだろう。それでもいいのだ。ただ、今のこの薪の言葉さえ、信じてくれるのなら。

幸奈にはとりあえず宝探し、という題目でここへきたということにした。まあ、あながち間違いではない。麻臨は眞菀祇たちにとつて宝玉に等しいのだから。

そうして薪と穂琥は移動をすると幸奈に伝う。幸奈は不安そうな顔をしながらも連れて行って欲しいと願い出る。薪はそれをまるで言ってくる予想していたかのように即断で許可を出す。薪が術を行使する。妙な浮遊感に襲われるのだった。

第十話 出会いと別れとその向こうにあるもの

気がついたらそこは地面。全く見知らぬ土地へ一瞬で移動してきた。眞匏祇とは本当に摩訶不思議なものだと幸奈は実感する。

薪は警戒心を強めた表情をする。それが一体何を示すのか。簡単なことだ。奴らがこの場に現れる。それだけの事。

「あらあ？もうきたの？」

誓茄が声を発する。

「そちらから呼んでおいてそちらが遅れるとはいいい度胸だな」

薪の言葉に誓茄はもたえる。これじゃ話にならないと薪は肩を落とす。すると後から圭と、新顔の男が現れた。

「始めてみるな」

「名乗るほどのものでは」

「伏せるか？」

「滅相も無い。必要が無いということですよ」

「名を与える価値が無いと？」

「考えすぎであります」

礼儀正しく見えるその男に薪は不吉な予感を感じた。

彼らは主からの伝達があるといってきた。薪は仕方なくそれを大人しく聞く。その伝達はこうだった。

―貴方を我が元まで案内申し立てる。気が向いたのなら足を運んで頂きたい。宜しく申し上げます、スウェーラ様

薪はそれを聞いて険しい表情になった。誓茄は嬉しそうに『スウェーラ』という名前なのかと尋ねてきたので薪はそれを否定した。すると少し残念そうな顔をしていた。

「以上で御座います。よろしければ我が主の下まで」

男はそう言って姿を消した。それに習って誓茄と圭も姿を消した。

一体何がしたいのか理解できないけれど、穂琥としては何故幸奈に突っ込んでこなかったのか疑問に思えた。それを薪に尋ねようと思ったが穂琥はその寸前で思いとどまった。薪の様子が明らかにおかしい。

「どうしたの？」

「奴は知っている・・・」

薪の言葉に首を傾げる穂琥。

スウェーラ、というのは昔、まだ巧伎が存命だった頃、巧伎がとある集落を訪れたときに仮名として使った名前だ。わざわざ偽名まで使ってその集落に入った目的など、最早言うまでもない。あえて言うなら、巧伎がその集落を出た時その集落は壊滅していた、とだけ言っておこう。

ともかく。そうしてスウェーラという名前を知っているということ、あの集落の生き残りで此方が慥々、乃至はその息子だということが既にわかっているということになる。その上で、我が元まで

来いと言ったと言う事は、あの、『主』という眞匏祇は此方を叩き潰す算段が出来たということになるだろう。長きに渡った復習の炎を叩きつけるために。

そうして考えている間に奇妙な気配を感じて薪は剣を構える。

現れたのは瞑。ただひたすら此方を睨む。その目はおそらく幸奈を見ている。

「何しに来た？」

薪の質問に瞑は答えない。本当に無口で何を考えているのかさっぱりわからない。その後には圭がついてきた。瞑の目は一度圭を遅いといわんばかりに鋭く睨むと圭は軽く萎縮した。

「ゴメン……。その女は始末しろって」

圭がそういう。幸奈はひとつ小さな声を漏らす。

「護りながら戦えるか、スウェーラよ」

瞑のその言葉を聞いて薪は一瞬ぞっとした。前にも似たような感覚を得たことがある。死の淵に立ったあの感覚。確実に瞑は死の気配を纏っている。直感的にそう思った薪だった。そしてその危険性から薪は一瞬で替装する。

「始末など、させるか!!」

いきなり薪が巨大な刀を取り出して振り回したので穂琥は驚いたが、よく見たら振ったその先に瞑がいた。一瞬で瞑は薪の前まで来てい

た。それに反応したから薪は刀を振るっただろう。その勢いで瞑が吹っ飛んだ。

「大した餓鬼だ」

言葉を発する。それだけでどこかダメージを受けてしまいそうな程だった。これが歴代の中で特有といわれ最強と謳われていた死神の重みなのだろうか。これがあの綺邑の親なのかと考えると正直ぞっとする。

圭が幸奈めがけて刀を振るう。それに穂琥は気づき、何とかして圭の刀を弾き返す。薪と瞑が視界の隅で戦っている。ならば、穂琥だって幸奈を護る何かをしたい。あまりなれない刀を手に持ち圭に向う。

「お前、慣れていないな。実戦したことあるのか？」

「い、一度だけ・・・」

「ふうん」

圭は興味もなさそうに声を出して再び襲い掛かる。

あちこちで激しい攻防が続く。一体何を考えているのだろうか。わからない。つい昨日、出会っただけの自分のために命を張って戦う少年と少女の行動の意味がわからない。どうして？

「どうして私なんかのために・・・」

震えた手を握って幸奈は小さな声を漏らす。こんな風に自分のために誰かが傷つくのは見たくない。見ていられない。でもどうしたらいいのかさっぱりわからない。

声。懐かしい声が聞こえる。

―生き抜けばいい・・・

はっとした。ずっと傍に居た大切な人の声。一体どうしてその声が聞こえたのかわからないけれど、幸奈はその声に耳を傾けた。かすれて消えてしまいそうな声だから周囲の音で簡単に聞き逃してしまいうそうだった。

―生きて生きて・・・幸せになればいい

愛しい人。この世で最も愛した人。

「翔蒔・・・？」

聞こえた声の主。紛れもなく翔蒔のものだ。幸奈は震える。

―いつかきつと救われる、そう言ったのはキミだよ・・・？大丈夫。俺はずっと一緒に居るから・・・

幸奈は地面に膝を着いて涙した。暖かい声。それが何故するのかなんて幸奈にはわからない。それでも、その声の暖かさに嬉しくて涙が止まらない。そして今、必死で戦ってくれている彼らのためにも、しっかりと意思を持たなければいけないのだと感じる。もう聞こえなくなった翔蒔の声を耳に残しながら幸奈はそっと立ち上がった。

薪は先程から違和感があって仕方なかった。滅多に喋らないと聞いているが、目の前のこの男、瞋は先程からずっと口元がにやけている。まるで何かを楽しんでいるかのように。嘲笑っているかのよ

うに。

「何がおかしい？」

薪の問いにやはり暝は答えない。しかし、暝は薪の質問とは全く関係のないことを口にした。その口元は酷く歪んだ笑みだった。

「礼、とだけ言っておこうかね」

「は・・・？何を・・・」

暝の攻撃を受けつつ攻撃しながらの会話のため、まともな会話はしていない。一方的な投げかけになっているその言葉のやり取りの中で薪はその暝の言葉の意味を理解できなかった。そうして、この時の言葉の意味を知るのは今からずっと先の事。

膨大な真稀が膨れ上がって破裂したのはそれから間もなくだった。それはあまりに突然で流石に薪もその真稀の破裂に対応できなかった。軽くその場から飛ばされて数メートル先に着地した。しかし、暝や圭を見るときと吹っ飛んでいるところからこの真稀の原点が何であるか悟った。

「幸奈・・・！？」

薪は真稀の風圧を抑えながら急いで幸奈の元に駆け寄る。幸奈の近くには穂琥が居るはずだ。近くで真稀の圧力を感じてしまっているくらい敵意がなくても危ないかもしれない。それに幸奈はコントロールが出来るとはとても思えない。

風圧の中心には震える幸奈が居た。その傍に穂琥が居る。まるで台風のように中心部だけ何もない、静寂とした空間だった。そ

ここに穂琥は呆然と立っていた。

「し、薪・・・！幸奈さんが・・・！！」

「ああ、正直驚いた。幸奈！もう大丈夫だから！落ち着いて・・・」
「し、しん・・・くん・・・」

幸奈は震えた声で呼応する。

「もう、平気だから。落ち着いて。ゆっくりと・・・そう、力を緩めて」

薪の呼吸に合わせて幸奈はゆっくりと眞稀を下げいく。今まで一度たりとも眞稀を使用した事がない者がいきなりこんなに大きな眞稀を爆発させてしまつては死に至る事だつてありうる。薪は自分の眞稀と同調させながらゆっくりと幸奈の眞稀を下げていく。

やっとの事で収まつた眞稀は先ほどの大きさなどまるで無かつた様に静寂と化し消え去つた。そして当の幸奈は氣を失つてしまつていた。

「やってくれるね！」

圭が叫び声を上げる。薪が鋭くそちらを睨む。後ろでゆっくりと立ち上がった暎を見て薪は眉を寄せる。全くだ。戦っているときからわかつていた。あの暎は全く本気で戦っていない。それで居て薪と拮抗して剣を交えた。元が死神であるのならそれは理解できるが、何が理解できないかつて、『主』と呼ばれるものに付き従っているということ。

「いつまで時間をかけているんだ？」

突然空気を割るようにして声を張ったのは鼓斗だった。圭が口惜しそうに状況を説明して少し不機嫌そうに顔をしかめた。

「瞑。お前が居ながら何でこんな事態になった？」

「・・・・・・」

「応える気など無いか」

呆れたように鼓斗は瞑から薪へと目を移す。それから強烈な眞稀が迸る。穂琥はそれに軽く気圧されたが薪は微動だになかった。あの程度の眞稀では気圧されるわけがないのだ。なんたってあの巧伎の眞稀を幼少期に何度も受け続けているのだから。それよりも慣れない死神の力のほうが今の薪にとっては堪える。

「ひとまず、その女を始末させてもらう」

鼓斗は素早く刀を用意すると薪に飛び掛る。

「へえ。幸奈をやるって言っているのにオレに突っ込んでくるのか？」

鼓斗の刀を簡単に受け流しながら薪が飄々と言う。鼓斗は面倒くさそうな表情を浮かべながらもふんと鼻を鳴らして言う。

「よく言うな。結局、お前を鎮圧しなければあの女に手など届かないだろう」

「へえ。わかっているねえ」

薪のその余裕の態度が気に入らないのか、鼓斗はさらに刀を振り回す。しかし、それを意図も簡単に受け流すので鼓斗はさらに手に力

を籠めていた。

ドン。鼓斗が勢いよく前のめりに倒れたのは薪が切りかかろうとしたところだった。薪は驚いて刀を止めた。鼓斗が素早く起き上がって怒号を上げた。

「瞑！何をしやがる！！事と場合によってはお前でもただでは済まんぞ！」

「黙れ、餓鬼風情が」

放ったその言葉に鼓斗だけでなく薪も竦む。

「そんな荒れた力で『スウエラ』が斬れるか」

低く重たいその声は耳を解して心臓を貫く。無駄に意気が上がってしまうほどの重圧に薪は齒嚙みする。

「さて。二対一か。キツイなあ・・・」

「居るだろう？そこに、眞匏祇が」

薪の言葉に鼓斗が笑いながら言う。穂琥を指差して。

「残念だがあいつは戦闘要員じゃないんでね。相当なことが無い限り先頭にはださねえよ」

薪の言葉に鼓斗はにやりと笑う。それから躊躇無く穂琥へ斬りかかる。薪は穂琥と鼓斗の合間に入って刀を受け止める。その直後、薪の右脇腹に激痛が走った。鼓斗を勢いで投げ飛ばしその激痛の原因を弾き飛ばす。

目の前で一体何が起きたのか、一瞬過ぎてわからない。鼓斗が来たかと思ったら薪が来て、薪が来たかと思ったら瞑が来て。それから目の前には誰も居なくなつた。

「薪！？平気！？」

「大丈夫だ、とりあえずここは引くぞ！」

「あ、う、うん！」

「させるわけ無いだろう！？」

鼓斗が鋭く刀を振り上げる。薪はそれを上手いこと避けて穂琥のほうへ走る。穂琥と自分との間に瞑が滑り込む。あまりに突然の乱入に勢いが止まらず瞑の懷に突っ込んでしまった。

本当に短い時間だったはずが酷く長い時間に感じられた。そつと頭の後ろに手が回されて瞑が薪の耳元に口を近づけて小さく囁く。その言葉を聞いて薪は仰天する。そうして瞑は薪を地面に叩きつける。

その時間は現実にしてみればきつと一秒も無かったかもしれない。それでも薪にとっては何十秒にも、何分にも感じていた。そして瞑の言つたその言葉の意味を理解できずに地面に叩きつけられても混乱が解けず、直ぐに動くことを忘れた。

「幸奈さん！！」

穂琥の叫び声で薪ははつとして飛び上がって幸奈の倒れていたほうを見る。そこで目に映つたものに薪は全身の力が抜けた。

幸奈の身体を見事に貫通する瞑の刀。幸奈は全く以って微動だにしない。瞑はそのまま幸奈を投げるように地面に叩きつけると踵を

返して数歩歩いて姿を消した。幸奈を仕留めたことで圭も鼓斗も満足したらしく、同じ様に姿を消した。

すぐさま傍に駆け寄った穂琥は幸奈を抱きしめて何度も名前を呼んだ。何度も。それでも幸奈はぐったりとして動く気配を見せない。

「幸奈さん！幸奈さん！！お願いです！目を開けてください！！幸奈さんってば！」

叫ぶ穂琥の手から薪は幸奈を奪い取る。そして様子を確認していた。穂琥はただ、幸奈が真っ青な顔をしてぐったりしているのでそれが怖くて涙が止まらなかった。確実に匂う死の気配。それだけで穂琥は目の前が真っ暗になってしまっていた。それに反して薪は意外に冷静に幸奈の状態を見ている。

「何しているのよ！！何とか早く治療しないと！死んじゃうよ！薪！」

「・・・いや、するだけ無駄だ」

「何言っているの！？諦めないでよ！？まだ息はあるんでしょ？」

「・・・」

穂琥の言葉に薪は答えない。ただ、刺された部分に手を当てているだけ。眞稀も何も練らずに。

「薪！あんたがそんな簡単に命を諦めるような奴だっと思わなかったよ！私がやるから！」

「いや、いいんだ。本当に」

「何が！」

「幸奈は死なない」

「だからっ・・・え？」

薪の言葉に穂琥は思考が急停止した。横たえてある幸奈の腹部、つまり瞋に刺されたところに左手を添えてただ黙ってみている。穂琥はそんな薪に不安な目を送った。そうして薪の状態を少し確認してはたと気づく。左手で幸奈の腹部を抑えているのはわかる。では、右手は？膝を立てているために右手がどうなっているのか見えない。それでも穂琥は何故かそれに嫌な予感しなくて薪に尋ねる。

「薪・・・？右手、どうしたの？」

「え？別に。怪我はしていないぞ」

「そう・・・なの？」

薪の言葉にきつと偽りは無い。それでも穂琥の不安は消えない。何か嫌な予感がする。それがどんどん膨らんでいくのはきつと直感と呼べるものなのだろう。

「薪、右手・・・見せて」

「何だよ。別に怪我なんてしていないって言っているじゃないか」「見せて」

穂琥は無理やり薪の腕を引っ張った。思いの他、薪の腕は簡単に前に出てきた。そして出てきた薪の手を見て驚いて思わずその手を離してしまった。

「ま、真っ赤ジャン・・・？！掌が・・・血まみれだよ？！」

「別に怪我じゃないって・・・」

掌を見せて薪が言う。確かにその掌に怪我の類は見えない。しかし、穂琥は一瞬でそれが何であるか理解した。

「薪！わき腹！！」

幸奈を跨いで薪の右に腰を下ろす。明らかに薪は嫌そうな顔をしていたが抵抗することは無かった。

「あぁっ・・・！？何これ？！」

薪の右脇腹は酷いまでに挟られていた。先ほど。穂琥の目のまで一瞬にて行われた刀の交差の中で瞑によって引き裂かれた部分だった。

「酷いよ、これ！？何とかして治さないと！」

「いや、今はいい。それより幸奈を運ぼう」

「え？！そんな事言っている場合じゃ・・・」

「それこそ、そんな事言っている場合じゃない。オレはまだ平気だが、このままだと確実に幸奈は死ぬ。いいのか、それでも」

薪の脅すような強い目に穂琥は無言で首を振った。それしか出来なかった。よしと言って薪は幸奈をおぶって立ち上がった。

第十一話 認められた者

幸奈を抱えたまま薪は家の中に入る。そんな薪を見て穂琥は不安を隠せずにいた。あの薪が、酷い汗を掻いている。それはでも、当然のことだ。わき腹が酷く抉られ、その状況で自分と大差ない女性を抱えてここまで運んできたのだから。途中、穂琥が代わると言っていたが、編に刺激を与えてしまえば死んでしまうからと交代を許さなかった。

幸奈を下ろしてから薪はため息をついて穂琥に向う。

「さて。ここにすればひとまず眞稀が保護をしてくれるから直ぐに死ぬようなことは無い。そこで、穂琥。悪いけど脇腹の治療を頼めるかな」

「あ、当たり前じゃない！」

穂琥は急いで袖をまくって薪の服を捲り上げる。その現状に絶句する。今までに見たことのない刀傷。まるで何かに食いちぎられたような酷い荒れ方。それだけじゃない。酷いところでは軽い壊死が始まっている。本来だったら死んでいてもおかしくない。

「大丈夫か？」

傷の状態を見て絶句した穂琥に心配そうに声を掛けた薪に穂琥は逆に怒号を上げる。

「それはこっちの台詞！何考えているの！？こんなので・・・！！普通、死ぬって！？」

「ま。オレ普通じゃないし。向こうもね」

「え？」

薪の言った言葉が理解できなくなったけれど、それがどういいうことか聞いている暇があったらさっさと治療をするべきだ。

穂琥はすつと深呼吸する。まず、薪の状態の確認。

血は薪自身が自分の眞稀で止めているから支障は無い。しかし、そのぶん体力を消耗していくことになるので早く何とかしなくてはいけない。そんな眞稀で無理に止血をしていることもあり、眞稀の流れの状態もあまりよくない。こういった怪我に効く治療は確か、城の書庫で見た記憶がある。それが今、有効かはわからない。未だかつて例を見ないものだから。それでもそれを試さなければ薪の腹部はどんどん壊死してしまふ。眞匏祇にとつて壊死とはイコール、消失ではない。上手いこと治癒することが出来れば再生だって容易なことだ。

「薪……。その、結構辛いかもしれないけど……。その……」

「いいよ。全てお前に任せる。穂琥が最善だと思うことをすればいい」

言い淀んだ穂琥に薪はそつと言う。その言葉の優しさが嬉しくて。そして何より、任せるといった薪からの信頼がたまらなく嬉しかった。それに何より、心配などする必要すらなかった。だって……。

―相手は薪だもの

穂琥は意識を集中させてから眞稀を手で籠める。そしてそつとそれを薪の患部に当てる。本来ならばここで耐え難い激痛が走り、呻き声の一つでも上げるものだが部屋の中はいたって静かだった。

今回、穂琥が行った治療には傷の具合によって変わるが、比較的時間のかかるものだった。まして、今の薪のように重症の傷に当たっては普通よりも時間がかかった。故に数分間の治療となる。本来ならば、数十秒で終わるものだが。

「は、はい・・・お、終わった・・・」

過度な集中と大きな真稀を一気に消費するということとで穂琥はどつと疲れて後ろに倒れた。

「大丈夫か？それにしてもまあ、任せるとは言ったが的確な治療だったなあ。やっぱ見る目はあるな」

「えへへ・・・。一応ね・・・少しは勉強したんだよ」

―薪の役に少しでも立てるなら・・・

穂琥はへらへらと照れ笑いしながら起き上がった。

「平気？辛くなかった？」

「何で？」

「だって・・・この術、相当辛いつて・・・。でも薪は呻き声一つ上げないでむしろ涼しい顔していたから」

「ああ、本来だったら苦渋の表情をしたかったけど頑張っている穂琥の意識の妨げになるからな、抑えた」

薪はそれを簡単そうに言って退けるので穂琥は驚く。そしてやっぱりこういうところでも薪には適わないと実感する。

「でも、次からはいいよ。痛いときは痛いって言って」

「おう、わかった」

さてと、そう言って薪は立ち上がって幸奈の元に腰を下ろす。

「ゆ、幸奈さん・・・平気なの・・・？こんな重症をそのまま長いこと放置するなんて・・・」

「支障は無いさ。これは時間の問題じゃないから」「え？」

「まま、気にするな。とにかく幸奈は平気だ。そんなわけでお前はとりあえずその返り血やら泥やらシャワーで落として来い。その間にオレが何とかしておくから」

「え・・・あ・・・はい・・・」

薪に言われるままシャワーに入る。一体、幸奈はどうなってしまったのか、穂琥にはさっぱりわからない。それでも薪が大丈夫だといったのだからきっと大丈夫なのだろう。

しつこい土埃や泥に悪戦苦闘してやっと落としきり、風呂場から出て着替えを済ませる。髪を乾かしている間にふと気配を感じて振り向いて驚いた。

「き、綺邑さん!？」

「聞きたい事が有る」

短く端的に綺邑は言い放つ。何かと穂琥が聞くと綺邑は瞑について尋ねてきた。何故、瞑を眞匏祗ではないと判断したのか。

「まだ、完全なわけじゃないけど・・・桃眼で視た時眞稀が全く無かったから・・・」

それを言ってからふと思った。薪の眞稀もきつと視る事ができないと。

「ほう。それだけか？」

綺邑の続いての質問。穂琥はそれに少し戸惑った。応えるべきか否か。

「それだけなら良い」

綺邑はそう言って立ち去ろうとした。穂琥は違うと否定の言葉を述べて綺邑の足を止めた。

「もう一つ・・・雰囲気が・・・似ていたの・・・貴女に・・・」

穂琥の言った言葉は脱衣所の部屋に木霊した。綺邑は冷たく見下ろしてくる。その目が薪より冷たいったらありやしない。

綺邑はその鋭い目をふっと伏せてからそうかただけ言って姿を消した。穂琥は呆然としながらその様子を見ていた。それから思い立ったように髪を乾かし始めた。

部屋のほうで何かの破壊音が聞こえたのは髪が乾いた頃だった。まだ全快していない薪に敵襲なんて来たら溜まったものではない。穂琥は慌てて脱衣所を飛び出してその足を止めた。

「ごめんって！悪かったって！本当に！！うわっ!？」

薪の叫び声が聞こえる。穂琥はただ固まっていた。

見れば。敵でもなんでもない。でも味方とも言にくい。それが薪にありとあらゆる足技を繰り出している。

「うわっほうい?! ちょっ?! マジ止めて?! ごめんって! 何度も謝っているじゃん?! うわああ!」

薪が押されているその映像を見て穂琥は長い目でその様子を見ていた。綺邑が回し蹴りやら踵落としやらひねり蹴りやらとにかく攻撃しまくっている。それを避ける薪の表情は最早必死。見ていて哀れと思うほどに。その薪の見事な圧され具合を見て綺邑が強いということとを改めて実感したような穂琥だった。

呑気に見ていたのはそれまでで家のあちこちが破壊されていくのを見て、さらに薪の必死さ具合を見て気づく。いや、敵じゃないにしても感知していない薪にあればどの動きをさせては傷口が開いてまた大変なことになってしまう。

「止めて!」

綺邑と薪の間に入って諸手を広げる。寸でのところで綺邑の蹴りは止まる。あと数ミリ遅かったら穂琥に当たっていただろう。そしてその圧力を感じて穂琥は一瞬だけめまいを覚えたほどだった。

「薪は今、完全じゃないの!!」

そう言って綺邑を睨んだ、睨んだ穂琥の目は一瞬にして迷いに変わる。綺邑のあまりに鋭い目が穂琥の心を折りにかかる。しかし穂琥はここでは折れていけないと必死になって綺邑に抗議する。

「ふん」

興味がうせたように綺邑は踵を返したので穂琥はほっとして座り込んだ。

「悪いな、穂琥。でもまあ、大丈夫だよ。避けなきゃそりや当たるけど、綺邑だって本気じゃないんだし。それに傷の方だってそこまです無理にはさせてないよ」

笑いながら言う薪に軽くイラつき覚えながらも仕方なくため息をつく。

「じゃあ、幸奈を頼んだよ」
「・・・」

綺邑の返事はない。いつの間にか綺邑は幸奈を抱えていた。抱える、といっても別に担ぐとか抱きかかえるとかそう言ったわけではなく、宙に幸奈がひとりでに浮いているように見えるだけだが。そうして綺邑はすつと姿を消してしまうのだった。

幸奈が大丈夫なのか尋ねると薪は小さく笑いながら何とかなると応えたので今度は薪の傷のほうを確かめることにした。

「大丈夫だって。そもそも綺邑をあんなふうに怒らせたのはオレ自身だしな」

薪はどこか可笑しそうに笑って立ち上がった。

「いやね。あいつにしては随分と珍しい事をしたからそれについて言い過ぎたら怒られた」

まるで子どもみたいに薪がいうので穂琥はどこか拍子抜けした。

「っていうか、薪がそんな風に突っ込むくらい綺邑さんが珍しいことしたの？」

穂琥の質問に薪は少し悩んだ表情を浮かべた。なんだ、それは。私には言いたくないことか、と穂琥は内心で腹が立っていた。

「ま、いいだろう！言ったら言ったで言ってしまったんだからいいだろう！」

薪は何か納得したように頷いてから穂琥の様子を窺った。

「え？私の怪我・・・？そういえば圭と戦ったときに随分と怪我したのに・・・今治っているや・・・」

「治してくれたんだよね、綺邑が」

薪はどこか楽しそうに言った。綺邑が自分の怪我を治してくれたことに驚きを感じていた。いや、それよりも死者を誘うことを生業としている死神が人を、真匏祗を癒すことが出来るのだろうか？

「ま、アイツも『特殊』だからな」

薪自身もそう言った事までは流石にわからないようだった。

「まあ、そんなわけだ。じゃ、少し休養を取ったらやりますか」「何を？」

「桃眼の完全な扱い方、といっておこうかな。オレだってそれに関しては詳しいわけじゃないけど、やらないよりはましだろう」「わかった」

薪は穂琥の全快しだい、直ぐにやるといつてきたので穂琥は首をか
しげた。傷なら綺邑が治してくれた。だったら平気ではないかと。
しかし薪はそれを否定した。綺邑が治したのは表面的な傷だけ。ま
だ、内側、つまり眞稀のほうの回復は出来ていない。眞匏祇は体内、
体外全て眞稀にて修復する。そしてその眞稀が枯渴したときは傷の
直りが遅くなる。さらには疲労度も溜まる一方だ。そこで綺邑が傷
を治してくれたおかげで傷のほうに眞稀を回さなくてすむので眞稀
の回復だけを待てば通常の状態に戻ることが出来るということ。

では薪は？ 薪は綺邑に治してもらったのだろうか。

「いや、オレは治してもらってないよ。オレは嫌われているからな
ゝ。穂琥は綺邑に気に入られてんだよ。だからそれについて突っ込
んだらさつきみたいに蹴り殺されそうになったんだけど」

薪の言葉に意外性を感じながらも穂琥は納得せざるを得なかった。

薪は軽く手を上げて部屋で休むといって穂琥に背を向けた。あち
こちが破損した家を治しながら薪は二階へと上がっていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5247y/>

真匏祇’

2011年11月18日04時13分発行